

一 橋 大 学 哲 学 会 報

一橋大学哲学・社会思想学会会報 No. 26
(「研究会便り」より通算第54号)

発行者 一橋大学哲学・社会思想学会

発行所 一橋大学哲学・社会思想学会事務局

tel./fax 042-580-8644

〒186-8601 国立市 中2-1 一橋大学社会思想共同研究室内

Email: phil6h.kaorun@r.hit-u.ac.jp

URL : http://www.soc.hit-u.ac.jp/~soc_thought/index.htm

【目次】

シンポジウムまとめ (府川 純一郎)	p.2
個人研究発表まとめ (大和 慶之)	p.4
総会報告	p.5
大学院研究テーマ (井頭ゼミ)	p.5
大学院研究テーマ (大河内ゼミ)	p.5
大学院研究テーマ (加藤ゼミ)	p.6
大学院研究テーマ (森村ゼミ)	p.7
昨年度における大学院生業績	p.8

シンポジウム 自然美と芸術美の関係

—両者の今日的分断状況を見据えて問い直す—

府川純一郎（一橋大学社会学研究科博士後期課程）

本シンポジウムでは、一哲学会では初めての美学系のテーマを取り上げた。哲学の古来の対象区分、所謂「真・善・美」に照らせば、一橋大学の哲学・社会思想は伝統的に前者二つに重きを置いており、言語社会学研究科の設立以来、人文学の学際的研究が深まりを見せる一方、同研究科には「美学」の専門枠が存在しないなどの事情があり、この分野での当大学からの学問的な発信は、僅少であったと言える。しかしながら加藤泰史先生が教鞭を取られるようになってから、ドイツ語圏を中心とした近現代の美学言説と、倫理学などとの領域横断的な考察に注目が集まっている。そこで企画提案者は専門的な議論を成立させつつ、多領域への拡がりも可能なテーマとして、自然美と芸術美の関係を選択した。もはや環境破壊抜きには語るできない自然を扱うことに、(自然)倫理学を動員しない理由がない点、また芸術面に言及する際には、音楽・建築・絵画などの具体的事例に関して、人文系・芸術系研究者の広範な知識を要する点で、必然的に領域を跨いだ議論が喚起され得ると思われたからである（そして実際に学内外から40名近い参加者が集まったことは大きな喜びであった）。

両者の今日的関係を問い直す、というシンポジウムの基本姿勢は、観念論の諸言説を嚆矢として、事実性や限界としての自然を超える人間精神の創造性の舞台として規定・自明視されて久しい芸術（美）と、芸術鑑賞の図式を退け、自然科学的知識に通暁した新しい観賞態度を掲げた環境美学の台頭を切っ掛けに、その復権と独自領域の獲得を達成しつつある自然美、という現代の状況認識を出発点としている。企画提案者は、この状況を、独自領域形成の必要性に駆られた両者が、二項対立を先鋭化した為に生じた「分断」状況だと捉え、これに多側面から弁証法的な思考を加え、その修正と再構築を目指した。というのも、境界を定め、互いを独立させるとともに疎外化することは、媒介関係が生み出す生産性に盲目になるだけでなく、互いの理念を満たすための回路が、実は対立する領域に隠れているという思考可能性をも閉ざしてしまうからである。そして、この「分断」状況の解消を、企画提案者は三人の論者に、それぞれ異なるベクトルから追求することをお願いした。

まず東口豊先生には、自然美から芸術美への関係の再検討として、「芸術の自然の模倣」という古典的テーゼの変遷を、音楽に即して解説頂いた。その際、六〇年代に環境美学とは別の形で自然美の復権を唱えた、アドルノの美学に焦点が当てられた。音楽が模倣に務める自然とは、従来は不動の宇宙的秩序体を意味していたのだが、アドルノにおいては、絶えず移ろう、不確かで捉えがたい、非同一的性質を意味するようになる。音楽は、自然のこの「未だ存在せぬもの *das noch nicht Seiende*」を志向して動き続ける在り方を模倣し、絶えざる「経過 *Verlauf*」として、己を構成していく。東口先生は晦渋で知られるアドルノのテクストを読みほぐし、アドルノが古典的テーゼを尊重しながら、不動の秩序や調和性から離れた自然、非同一的な志向を持つ自然といった、それまでは見えてこなかった姿を明らかにする機能を、芸術に付与していたことを明らかにした。

続いて伊東多佳子先生には、両者の中間に位置する環境芸術の知見から、両者の鑑（観）賞態度に境界を据えることの危険性と非妥当性を論じて頂いた。伊東先生は、ナッシュの《トネリコのドーム》に寄せられた批判を手掛かりに、自然を産業的・生活的・学問的な利用素材とみなして加えていけば問題

にされない支配力が、芸術制作として行使された途端、反発を引き起こしてしまうのはなぜだろうか、と問いかけた。伊東先生の見解では、環境美学が拒絶した、自然観賞に芸術鑑賞の図式（ピクチャレスク）が入り込むことと逆の事態が、つまり芸術鑑賞に（人間の介入のないものを貴ぶという）自然観賞の図式が入り込んでいることが、ここで生じている。自然倫理学では、人間中心主義と自然中心主義の二項対立が未だに根強い思想的影響を保持しているが、後者に好意的な少なからぬ環境美学者は、環境芸術を自然に対する美的侮辱として批判する。しかし伊東先生は、人間の介入の外にある原始の自然という表象の無意味さと、今日における不可能性を指摘し、そこには「自然の内在的価値」を、自然存在の不可侵性と絶対性に、強く切り詰めたが故の誤りがあるとした。そして様々な作品例を紹介しつつ、環境芸術は人間の介入を通して「自然の内在的価値」を示すのだが、その価値とは、自然は利用的・道具的な思考対象の外部として、人間に対して存在することが可能である、という意味なのだと言われた。こうした概念運用を巡っては、質疑応答の際に異議も含む様々な意見が寄せられた（自然の「内在的」価値は人間が与えるとされた点等）ものの、まだ日本では理解が進んでいない環境芸術に大きな議論喚起力が備わっていることが認識されたことは、大きな成果であった。

最後の論者は芸術美から自然美への関係の検討として、阿部美由起先生が、ゼールの主著『自然美学』を中心に、自然観賞における芸術鑑賞の図式の排斥に対して、批判を展開した。阿部先生は、ゼールが自然美の三つの知覚モデルを打ち立て、それらに価値序列をつけない一方で、芸術的図像を介した想像的知覚モデルこそ、最も現代の知覚状況に即していると論じた点に注目した。自然美の享受において、芸術的（絵画的）図式を導入することは、その図式を常に凌駕していく自然の無限の多様性故に、芸術創作の絶えることなき契機となるだけでない。グルスキーの作品に見られるように、絵画において描写される自然が、単なる環境への美的没頭や享受においては看過され易い、歴史性や人間社会からの搾取性を開示し、自然に刻み込まれた多層的性格や傷跡を認識させる機能を持つ。阿部先生はこれらを説得的に論じ、ここから芸術を自然の媒介と捉える総括を引き出したが、これは期せずして東口先生と結論を同じくした。

質疑応答の時間では伊東先生の「自然の内在的価値」を巡って、その後の場所を移動しての延長討論では東口先生に対して、アドルノの自然への形而上学的な理解を巡って多数質問が寄せられた。これらの質問には、自然の背後に主体相似的なものの存在を要請することが、哲学的・美学的・倫理的に如何に是認されるのか、あるいはその存在を導入することなしに、如何に自然の価値を確立することができるのか、という根本問題が控えていたと言ってよい。また自然美と芸術美の関係を媒介的・錯綜的なものとして捉え直すという趣意に基づき開催された本企画は、各報告とその総合的検討を通じて、この美的認知枠組みの変換が自然における二つの側面の発見に繋がったことも確認された。一つ目は、自然は調和的に循環するシステムではもはやなく、人類とともに不可逆の滅びの危機に瀕しているという、自然の歴史性格であり、二つ目は、自然も「移ろう」存在として、人間と同じく不動の秩序に安んじるものではなく、より違う状態を志向する、否定的・非同一的側面を持つということである。自然の素朴な美的表象が覆い隠す、或いは等閑にするこれらの側面は、自然美と芸術美との硬直的二元論の解消から、明らかにされたと言ってよく、これはシンポジウムの最大の成果として捉えられるだろう。

なお、伊東先生は今回の発表・討論を発展させ、第68回美学学会全国大会（2017年10月8日）にて、「環境芸術は自然に対する美的侮辱か - 環境芸術をめぐる倫理的問題について」と題された研究発表を行われた。

本発表では、『精神現象学』「B. 自己意識」章の「主と奴」論を自己意識の陶冶論として捉え、自己意識と物の関係について考察した。その考察を通じて、「主と奴」における奴の自己意識の陶冶と奴と自己意識の次の形態であるストア主義との関係、そして主の自己意識の位置づけを明らかにすることを目指した。

本発表では、「主と奴」の奴の陶冶に焦点を当てる。なぜならコジェーヴ（『ヘーゲル読解入門』）やイポリット（『ヘーゲル精神現象学の生成と構造』）らのように、主と奴の関係を重視する解釈をとると、自己意識の次の段階である「ストア主義」との繋がりを説明することができないからである。奴が物との関係でしか自立性を獲得できないことを強調することで後のストア主義との繋がりをより正確に捉えるようとした。

まず初めに、「自己意識」章の前半部で、自己意識が自立性と非自立性という矛盾した性質を抱えた存在だということを指摘した。だが、自己意識は当初矛盾した性質を一度に抱えることができない。そこでヘーゲルはそれらの性質を二つの自己意識に振り分ける。それが主と奴である。主は自立的な自己意識であり、奴は非自立的な自己意識である。

その次に「主と奴」で主の自己意識がどのようなものなのかを考察した。その中で、主の自立性が奴を前提としなければならないことと主が個別的な契機に囚われた存在だということを明らかにし、奴に論点が移行していることを確認した。

最後に奴の自己意識の陶冶について考察した。奴は主の支配の下で陶冶を完成させる。この陶冶が完成するためには「死への畏怖」「主への奉仕」「労働」という三つの要素が揃わなければならない。そして本発表では、奴の陶冶において主はこの三つの要素がうまく働くための一つの契機、つまり上記の三要素を導出するための単なる契機でしかないと主張した。

確かに奴は自分自身を陶冶し、自分が自立的な存在だと自覚する。しかしそれはあくまで奴と物との関係においてでしかない。つまり他の自己意識から自立的だと承認を得たわけではない。奴は他の自己意識との関係から、（前段階の欲望の自己意識と同じく）物との関係へとうち戻される。自己意識が物を労働による製作物と捉え、自分の運動の結果として捉えるとき、思惟する自己意識が登場する。そしてその思惟する自己意識の自分との直接的な関係に固執する形態がストア主義だと主張した。

ところで、今回の発表では多くの貴重なご意見、ご質問をいただいた。まずは、本発表のキーワードの一つの「自立性」という用語についてである。具体的には「欲望の自己意識」の自立性と「主と奴」のそれは意味が違うのではないか、というものだった。また、次のような質問もいただいた。主が奴に生活を支えてもらわないといけないことは初めから明白であり、わざわざ「主と奴」によって、「主が非自立的であり、奴が自立的である」と主張する意義はないのではないか、という質問である。以上の質問には当日十分にお答えすることができなかったが、今後の研究を進める上で有益なものだった。これらの質問で得られた視点を活かして研究を進めていきたい。

総会報告

本年6月3日に一哲会2017年夏大会および第11回総会(定例)が第3研究館研究会議室にて開催された。大会の参加者は36名であった。そのうち本学24名、学外者が12名であった。約3分の1が学外者であり、本学会が学内のみならず、学外の人にも広く関心を持たれていることがわかる。

また、同日開催された総会では、議長に明石氏を選出し、総会議案書に基づいて活動報告がなされ、承認された。活動計画に関連して院生より価値論争に関するシンポジウム開催の提案がなされ、幹事会で検討することとなった。また、院生幹事の任期についても質問と意見が出され、こちらも幹事会で検討することとなった。

大学院ゼミ研究テーマ

井頭ゼミ

氏名	主・副	学年	研究テーマ
須田悠基	主	M1	言語哲学
山岸諒己	副	M2	「育児すること」に関する概念使用
若松孝佑	主	M2	メタ形而上学
徐子程	副	M2	言語哲学・意味理論・応用言語学
上田尚徳	副	D2	ヘーゲル
小倉翔	主	D4	分析哲学(認識論) / アプリオリな正当化
守博紀	副	D4	アドルノを通じた言語哲学・美学・倫理学
清水雄也	主	D5	社会科学における因果性

大河内ゼミ

氏名	主・副	学年	研究テーマ
神岡 秀治	主	M1	マルクス
北田智美	主	M2	ヘーゲル『精神現象学』における自己と承認
久富峻介	主	M2	ヘーゲル『精神現象学』「自己意識」について
竹田真澄	主	M2	マルクス
大和慶之	主	M2	ヘーゲル
牧田凌平	主	M2	マルクス

稲垣生真	主	M3	フッサール時間論
市川裕之	主	M3	ホネット
吉田尚生	主	M4	イエナ期ヘーゲル研究
生田目理恵	副	M4	アレント
小島雅史	主	D1	フッサール『危機』書における生世界概念と明証性
菊地賢	主	D1	マルクス
岩田健佑	主	D1	ヘーゲル「美学講義」について
堀永哲史	主	D1	ヘーゲル『大論理学』
太田浩之	主	D2	アダム・スミスにおける自然概念
上田尚徳	主	D2	ヘーゲル
岡崎佑香	主	D4	ニュートンとヘーゲル
岩井洋子	副	D4	ヘーゲル
真田美沙	主	D4	ヘーゲル
守博紀	副	D4	アドルノを通じた言語哲学・美学・倫理学
王燕敏	主	D5	承認論に基づく批判的教育理論の構築 -ホネット承認論の教育哲学への応用-
中島新	主	D5	シェリング自然哲学
岡崎龍	主	D5	ヘーゲルの主体形成論
額賀京介	副	D6	フロム
隅田聡一郎	副	D6	マルクス
瀬川真吾	主	D7	ドイツの生命倫理学
横山陸	主	D7	シェラーなど
塚越健司	主	D9	フーコー
色摩泰匡	副	D10	ヘーゲル

加藤ゼミ

氏名	主・副	学年	研究テーマ
金納 真優子	主	M1	ショーペンハウアーの意志論、自由意志
津田 栞里	主	M1	バウムガルテンにおける自由論
朴 俊炫	主	M1	服部宇之吉哲学
松井 美樹	主	M1	思惟する「私」と時間
遠藤 勝愛	主	M2	徳倫理学と政治哲学
高橋 萌	主	M2	ハンナ・アレントの政治哲学
久富 峻介	副	M2	ヘーゲル『精神現象学』の相互承認
青木 崇	主	D1	ハンナ・アレントの政治哲学

鄭 虹	主	D2	ルカーチにおける物象化
秋葉 峻介	主	D2	生命倫理学 (安楽死/尊厳死法制化)
那波 泰輔	副	D2	「戦争体験」の形成と変容
高木 駿	主	D4	カント美学における多元主義
魏 偉	主	D4	環境倫理学
王 燕敏	副	D5	承認論に基づく批判的教育理論の構築
横山 陸	副	D7	シェーラーなど
瀬川 真吾	副	D7	ドイツの生命倫理学

森村ゼミ

氏名	主・副	学年	研究テーマ
浜瀉茉莉	主	M1	18世紀イギリスのナショナリズム
吉田遥	主	M1	モーリス・バレスの思想
河淵悠希	副	M2	マケドニアにおけるナショナリズムの形成
庄沙智子	主	M2	18世紀フランス史
杉本諒	副	M2	ロシア民話絵本 (現在留学中 2017年4月～)
高橋駿仁	主	D2	碑文・文芸アカデミーとニコラ・フレレ (現在留学中 2017年秋～)
春山雄紀	副	D3	18世紀ボヘミアの社会政策
橋詰かすみ	主	D3	ルソーとジュネーヴ共和国
増永菜生	主	D3	ルネサンス期イタリアの人文主義と政治 (現在留学中 2017年秋～)
田中資太	副	D3	スペイン領ネーデルランドの教会改革 (現在留学中 2017年秋～)
萩田翔太郎	主	D3	19世紀初頭のイギリスの労働者文化

昨年度における大学院生業績

加藤ゼミ

・高木駿

(1) 学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文、著書

- 1) 高木駿, 「趣味判断『このバラは美しい』に関するカントの自己矛盾?」, 『美学』第 248 号, 美学会, pp.13-24, 2016 年.
- 2) 高木駿, 「趣味判断における快の感情の生成—『認識一般』からの捉え直し」, 『日本カント研究』第 17 号, 日本カント協会, pp.157-171, 2016 年.
- 3) 高木駿, 「『趣味の主観主義』を拡張する—『判断力批判』における『認識一般』を導き糸に一」, 『哲学論集』第 45 号, 上智大学, pp.73-88, 2016 年.
- 4) 高木駿, 「趣味判断が誤るとき:『判断力批判』における情感的意識の観点から」, 『美学』第 250 号, 美学会, pp.13-24, 2017 年.

(2) 学術雑誌等又は商業誌における解説、総説

(学術雑誌における翻訳)

- 1) ヨハン・ゴットリープ・フィヒテ／高木駿訳, 「1807 年ケーニヒスベルク知識学」, 『フィヒテ全集』第 14 卷 (大橋容一郎監修), 哲書房, 2016 年.

(3) 国際会議における発表

(4) 国内学会・シンポジウム等における発表

(招待講演)

- 1) 高木駿, 『超越論哲学としての『判断力批判』』, 科学研究費 基盤研究(C)「超越論的論証:その本質と発展可能性」平成 28 年度公開研究会, 早稲田大学, 2017 年 2 月.
(口頭発表)
- 2) 高木駿, 「カントの趣味判断と多元主義—理論的領域における展望」, 上智大学哲学会第 84 回大会, 上智大学, 2016 年 6 月.
- 3) 高木駿, 「カント美学とヘノロジー—『判断力批判』における「情感的意識」を契機として」, 第 2 3 回新プラトン主義協会大会, 名古屋工業大学, 2016 年 9 月.
- 4) 高木駿, 「カントを趣味のエリート主義から真に解放する」, 第 8 回新規環境美学研究会, 東京工芸大学, 2017 年 3 月

・那覇泰輔

(1) 学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文、著書

- 1) 那覇泰輔, 「ハチ公像が時代によってどのように表象されたのか:戦前と戦後以降のハチ公像を比較

して、『年報カルチュラル・スタディーズ』、カルチュラル・スタディーズ学会、VOL.2、pp.85-99、2014年。

(2) 学術雑誌等又は商業誌における解説、総説など

(3) 国際会議における発表

1) NABA, Taisuke, “Transformation in the Meaning of Generation in Japan: The Combination of Generation and Culture in the 1930s”, The 16. Hitotsubashi International Conference on Philosophy/Social Philosophy, Hitotsubashi University, Kunitachi, June 2016.

(4) 国内学会・シンポジウム等における発表

1) 那波泰輔、「なぜ1940年代にできたサークル「山脈の会」が今も続いているのか—戦争体験の固執から」、『カルチュラル・タイフーン2014』、カルチュラル・スタディーズ学会、府中市、6月・2014年。

2) 那波泰輔、「地域における軍用施設に対する住民の意識の変化—東京都北区を例として—」、『第89回日本社会学会』、日本社会学会、福岡市、10月・2016年。

3) 那波泰輔、「米軍王子野戦病院反対運動における「反対」の諸相」、『第6回地域ベ平連研究会』、地域ベ平連研究会、新宿区、11月・2016年。

・横山陸

(1) 学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文

1) Yokoyama, Riku, “Liebe als Kommunikationsform in der Intimität”, *Thaumazein*, Rivista Di Filosofia, Vol. 3, pp. 365-382, Verona, Italy, December 2016.

(2) 学術雑誌等又は商業誌における解説、総説など

(3) 国際学会における発表

1) Yokoyama, Riku, “Selbstgebung und das Heilige in Max Schelers Religionsphänomenologie”, Workshop: Selbstgebung und Selbst-Gegebenheit als religionswissenschaftlich, phänomenologisch, metaphysisch, soziologisch, indologisch, sinologisch, psychoanalytisch und literarisch relevantes Prinzip, Sils Maria, Schweiz, September 2016.

2) Yokoyama, Riku, “Zur Aktualität der Wertethik Max Schelers”, A Colloquium in Commemoration of the 100 Year Anniversary of the Publication of Scheler’s Formalism in Ethics: Max Scheler, His Thought and Influence, Maynooth, Ireland, November 2016.

(4) 国内学会・シンポジウム等における発表

1) 横山陸、「『研究倫理』は誰にとっての『倫理』であるか?」、第17回一橋哲学フォーラム、一橋大学、2016年4月。

2) 横山陸、「マックス・シェーラーにおける『感情の哲学』」、日本現象学会第38回研究大会、高千穂

大学, 2016年11月.

大河内ゼミ

・太田浩之

(1) 学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文

(2) 学術雑誌等又は商業誌における解説、総説など

(3) 国際学会における発表

(4) 国内学会・シンポジウム等における発表

1) 太田浩之、「アダム・スミス『法学講義』Aノートにおける状況分析と正義論・行政論についての考察」、東京唯物論研究会四月定例研究会、法政大学、2016年4月。

2) 太田浩之、「アダム・スミス『法学講義』における自然概念」、第41回社会思想史学会、中央大学、2016年10月。

3) 太田浩之、「アダム・スミス『道徳感情論』における自然神学」、第20回一橋大学哲学・社会思想学会、一橋大学、2016年11月。

森村ゼミ

・増永菜生

(1) 学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文

(2) 学術雑誌等又は商業誌における解説、総説など

1) 共訳 藤崎衛（監修）「第一リヨン公会議（1245年）決議文翻訳」『クリオ』30号、2016年、100-127頁。

2) 増永菜生「書評 松本典昭著『メディチ宮廷のプロパガンダ美術』」『史林』99号、4巻、2016年。

3) 増永菜生「紹介 Isabella Lazzarini, Communication and Conflict: Italian Renaissance Diplomacy in the Early Renaissance, 1350-1520」『史林』99号、2016年。

4) 共訳 藤崎衛（監修）「第二リヨン公会議（1274年）決議文翻訳」『クリオ』30号、2017年、123-147頁。

5) 共著 笈川侑也、櫻田宗紀、藤田風花、増永菜生「書評 服部良久編著『コミュニケーションから読む中近世ヨーロッパ史—紛争と秩序のタペストリー』」『史林』100号、2巻、2017年。

(3) 国際学会における発表

(4) 国内学会・シンポジウム等における発表